

## 2人の教員が同じ方向で関わるためのあり方

—卒業研究過程のふり返りをもとに—

原田 慶子<sup>1)</sup> 齋藤 貴子<sup>2)</sup>

### **The way how to cooperate two teachers for the same direction. — It looks back upon graduation research process. —**

Keiko HARADA Takako SAITO

**要旨：**本研究の目的は、教員2人が同じ方向で関わるためのあり方について考察することである。卒業研究における学生への関わり方の過程をふり返ることによって、以下のことが明らかになった。

1. 学習目標や関わり方の方向性、お互いの役割の確認を早い時期に行う。確認後も途中で教員間に考え方の相違がある時は、2人で話し合う場をもち調整する。
2. 新人教員が窓口となるスーパービジョンですすめ、要所で2人の教員が参加するゼミナール形式の話し合いをする。
3. 話し合いの場では、学生の反応や話し合いの流れをみて、お互いに補い合う。

**キーワード：**卒業研究、2人の教員、スーパービジョン、ゼミナール

**Summary :** The purpose of this research is to consider the way how to cooperate two teachers for the same direction. By looking back upon the process of graduation research, the following things became clear.

1. A study target, and the method of relation and each other role should be checked early. When a difference of a view exists among teachers on the way, it should be discusses and adjusts by two persons.
2. It is the Supervision from which a newcomer teacher becomes a window, and discusses a seminar at the key point.
3. Two teachers should support each other based on a student's reaction or the flow of talks.

**Keyword :** Graduation research, two teachers, Supervision, seminar

### I. はじめに

昨年から本学の卒業研究に関わってきた。立場上、他の教員（今回は新人教員）と一緒に学生へ関わることが求められている。このことは、学生の立場からみると、2人の教員から関りをもたれることになり、2人の考えを聞くことができるというメリットがある反面、戸惑いをもつことも多いのではないかと考えられる。その理由は、話の内容の意味を十分に捉えられない学生にとって、教員が同じようなことを伝えていても、言葉の使い方が異なるだけで、違うことのように解釈して

しまう場合もあるからである。ましてや、相反するアドバイスがされると、学生は混乱してすすめなくなるので、2人で関わる時には、相反した関わりをしないようにしていく必要がある。

昨年は、筆者が中心になりすすめたが、教員同士の連絡が充分にできず、時には2人のアドバイスが矛盾し、学生を戸惑わせたことが反省点としてある。

そこで、今年はその反省をふまえて、学生が戸惑わずに研究のプロセスをすすむことができるように、意識的に取り組んだ。その過程をふり返る

ことで、他の演習形式の授業を新人教員と共に関わる時にも活用できるのではないかと考えられるので取り組むことにする。

看護基礎教育において、教員に関する研究としては、実態調査が多くみられるが<sup>1)~3)</sup>、教員2人の関係をもとにして学生へ関わる文献は見出せなかった。

## II. 研究目的

卒業研究における学生への関わりを振り返り、2人の教員が同じ方向で関わるためのあり方について考察する。

## III. 研究方法

### 1. 対象および倫理的配慮

本研究の趣旨を説明し、承諾の得られた担当グループの学生5名と、共同研究者でもある新人教員

### 2. 期間：2002年4月～11月

### 3. データ収集方法

- 1) 参加観察による学生の反応
- 2) 新人教員との話し合い
- 3) 学生との話し合いの場面を、新人教員がウィーデンバックの考えをもとにして作成した再構成の記録

### 4. 分析方法

- 1) 再構成の記録については、研究者各々で学生への関わりとして同じ方向で関わるために意識している場面を取り上げ、それを2人で照合し、コンセンサスを得た。
- 2) 参加観察による学生の反応と新人教員との話し合いの内容については、上記のように同じ方向で関わるために意識している場面を整理し、まとめた後に内容を見てもらい確認した。

## IV. 結果

4月にグループ全員と教員との顔合わせから始まった卒業研究は11月の発表会をもって終了した(表1)。その間の学生と教員との関わり、および教員2人の関係を振り返ることにする。

表1 卒業研究発表会までの流れ

4月中旬	学生と教員の顔合わせ
4月下旬	2人の教員による、学習目標や関わりの方性の確認
5月～6月	研究計画書作成の関わり…ゼミナール(1回)
6月下旬	研究計画書の提出
7月	データ収集方法(アンケート作成)の関わり…ゼミナール(2回)
7月下旬～8月初旬	データ収集
8月	データ分析の関わり…ゼミナール(1回)
9月	論文構成の関わり…ゼミナール(2回)
9月下旬	集録用原稿の提出
11月初旬	発表準備の関わり
11月中旬	卒業研究発表会

最初の顔合わせの時、2人の教員間には、学生への関わりについて違いがあるのではないかと感じられた。それは学生の状況把握の違いによる、気持ちの持ち方が関係していた。新人教員は4月に入職して直接学生と関わるのは初めてであり、指導ができるかと不安を持っていた。学生の状況が捉えられず、学生にどこまで求めればよいのか、どのように関わればよいのかということであった。

そこで、早期に話し合いをする必要があると考え、4月末に卒業研究の学習目標を確認し、学生の主体性を促す関わりについても話し合った。そのことによって、学生へ関わる方向性が明確になり、新人教員も気持ちの準備ができ、学生へ余裕をもって関わるできるようになった。

そして、学生がどちらの教員へ行くかで迷わないよう、窓口を一つにするために、新人教員が窓口となり、筆者は新人教員をサポートするスーパービジョンの形ですすめていくことにした。しかし、そのように決め学生に伝えていても、最初の内は以前から知っている筆者の所へ来るが多かったので、窓口の再確認をしたりした。また、アンケートの依頼文は私が関わるというように、役割分担をしたところもあった。夏期休暇のように長期にどちらかが不在の時は、お互いにどこまで関わったのかを伝えるようにしてすすめていった。それと同時に、学生たちにも、教員にどのような関わりを持たれて、どこまですすんでいるのかを別の教員に話すよう促していった。このことによって、それぞれの教員の関わりを、学生たちがどのように受け止めているのかを把握することができ、教員2人の関わり方の調整や修正に役立った。スーパービジョンに関する話し合いは、研究過程の途中では充分もてなかったが、最終的な

新人教員のコメントは、形式的な窓口としてではなく、共通認識のもと、学生へ同じ方向性で関わる上で有効な関係だったということであった。

さらに、要所で2人の教員が出席してゼミナール（以下ゼミとする）形式の話し合いを行った。その内訳は、①研究計画書作成1回、②データ収集方法2回、③データ分析1回、④論文作成2回の合計6回であった。ゼミの前に新人教員と学生との話し合いは数回もたれており、必要時に新人教員の要請で6回のゼミは行われた。最初は本来のゼミには程遠いものであったが、回を重ねるにたが、学生は資料を準備し、自分たちがどこ

まですすんで、どこで困っているのかななどを提示できるようになっていった。そして、最初は促してもなかなか発言できなかった学生も自分の考えを発言できるようになり、学生たちだけで話し合いが深められていくようになっていった。このゼミの中でも、途中で教員2人の考え方の違いは出てくることもあり、それに気づいた時は休憩を取り、学生へ関わる方向性を確認していった。このような休憩は、学生にとっても、学生間の考えをまとめる時間になっていた。このゼミの中で、学生へ同じ方向で関わるために意識している場面を取り上げ、以下に述べていく。

表2 【場面1】 アンケート作成について

学生の反応 私が話したこと	新人教員が感じたり 考えたりしたこと	新人教員が話したこと
①私「アンケートでデータを収集した後、どうするつもりだったのかな？」  ②学生は何を言っているんだ、なんの話をしているんだという表情をしている。	③おっ、いいぞ。データ収集後の分析のことを指摘してるな。わかってないな。分析が研究で一番の恐ろしい部分なのに。でもなあ自分の経験した分析方法しかあたしが正当性をもって学生に伝えることはできないな。	④「今先生が言っていたのは、データの分析方法のことね。これは研究なんだから、データを収集した後にそのデータからどんな方法でデータを読み込むか、どう解釈していくかということなんだよね」

【場面1】では、①で私の話したことが、②の学生の反応から、新人教員は学生に伝わっていないと感じ、③でこれは重要なことだということを考え、それを伝えるために④で説明している（表2）。

表3 【場面2】 アンケートの分析（その1）

学生の反応 私が話したこと	新人教員が感じたり 考えたりしたこと	新人教員が話したこと
①学生『私たちの研究では、意識があって言葉があるという風にしていくから、関連はあると思います』	②ここにきて、用語の定義が生きているよ。と、実感できているのかしら？  ④でも、アンケートの結果を見ると意識とつながっていないものが多いし、意識が全て記入されているわけではないので、関連づけることが難しいのかもしれない。学生のこのままの考えのまま分析を続けるのは無理がありそうな気がする。どうしていったらいいのかな？	③「そうだよね。言葉がけと意識はつながっているという風に設定したんだものね」

<p>⑤私「意識していても言葉以外に伝える方法があるよね」</p> <p>⑦学生は直ぐに答えられないでいる</p> <p>⑨「はい」と、学生はしまったという表情をし、自分たちで話し始めた。</p>	<p>⑥それよそれ！ノンヴァーヴァルコミュニケーション！そっかやっぱり最初からここが気になっているんだ。この一言で学生の凝り固まった意識を変えさせることができるかな？</p>	<p>⑧「ノンヴァーヴァルコミュニケーションという言葉聞いたことがある？」</p>
--	---	---

【場面2】では、④の新人教員の考えていることと関連して、その場の流れを察して、私の⑤が出ており、それに対して、⑧で学生がわかる言葉に言い直されている。それによって、⑨の学生の反応が返っている（表3）。

表4 【場面3】 アンケートの分析（その2）

<p>学生の反応 私が話したこと</p>	<p>新人教員が感じたり 考えたりしたこと</p>	<p>新人教員が話したこと</p>
<p>①学生は用語の設定をしたものの、今更になって不安を感じているらしい。自分たちの考え方に自信が持てないでいる様子であった。</p> <p>④学生はやや沈黙気味。</p> <p>⑥私「今の先生の話聞いてどんなことを気づいたかな？」</p>	<p>②用語の設定はさせたが、概念構築をしていないために自分たちの意見に自信がないんだな。今回はしょってしまったことが響いているなあ。学生にとっては大変かもしれないけどここでしっかり概念構築をさせるといいんだろうな。</p> <p>⑤今のあたしの言葉で学生は理解してくれたのだろうか？やや不安が残る。きっと学生は概念操作といっても自分たちの拠り所になるような文献に出会ってはいないからまだピンとこないのかもしれないし。</p> <p>⑦おおっ、【学生に教えるのではなく、気づいて欲しい】という共通理</p>	<p>③「意識と言葉がけはつながっているとされたけど、学問的にはどういわれていて、だから自分たちのこの研究ではこうするというのがしっかりできていないんだよね。もしそれがしっかりとできているとこういった問題に直面したときに、『学問的にもこう言われているし、自分たちのこの研究ではこう設定したので』と言うことができるんだよね。本当はそれをしっかりさせた上で研究に取りかかるとは、私達教員としては、あなた達にそこまで要求するのは酷かなあとと思ってやめたんだよね。でもその概念操作をしていくと自分たちの研究の拠り所ができるから、強みになれるんだよね」</p>

⑧学生「なんとなく、本とかで意識とは、ということ調べておかないといけないんだなと思いました」	解をここで実践しているぞ。そうきたか、でもこの後学生がどんな反応をするのか怖いよ。わかったかしら、伝わったかしら？ ⑨そう、わかってくれましたか。でも、きっと調べなくてはいけないことをわかってはいても調べる方法がわからないんだろうな。	
--	--	--

【場面3】では、③の新人教員の話の内容を④のような学生の反応から、学生が理解できていないように感じ、⑤で学生へ問いかけをしている。それに対して、学生は自分たちの理解したことを⑧で返してくれている(表4)。

## V. 考察

### 1. 方向性の確認、調整

最初の顔合わせの時に、新人教員がどのような思いで学生の前にいるのかを確認できたことは、その後の2人の関係や学生との関わりに影響が大きかったといえる。今回は、新人教員が思っていることを言葉にしてくれたのでわかったが、新人教員と一緒に学生へ関わる立場の教員は、学生だけでなく新人教員の気持ちを聴いていくことも必要だと気づかされた。それによって、卒業研究の目標を確認し、学生へ関わる姿勢についても話し合いができ、同じ方向性で出発点に立てたといえる。しかし、方向性を確認したといっても、異なる2人が、異なる学生個々に関わるわけで、物事に対する考え方や受け取り方に違いがでてくるのは当然のことである。したがって、その後も教員間の違いをお互いに気づいた時は確認し、学生に教員の関わりをどう受けとめたかを話してもらうことで調整ができた。つまり、最初だけでなく、全期間をとおして学生へ関わる方向性を確認し、調整していくことが重要だといえる。ホロウェイとウィラー<sup>4)</sup>も、2人の教員による学生へのアドバイスが矛盾するのを避けるためには「研究指導に関して共通の考えや、その研究方法と研究課題に関して同じ展望をもち、互いにコンタクトをとっていくことが重要である」と述べている。

### 2. スーパービジョン

スーパービジョンは、もともとカウンセリングに関わっている人が、自分が相談を受けてい

るクライアントやそのクライアントとの関係について、自分より経験を積んでいるカウンセラーに相談し指導を受ける関係のことである。個人を対象とした援助活動をすすめていく看護の世界においても、その必要性や実践例が述べられている<sup>5) 6)</sup>。これを看護基礎教育でも、今回のような新人教員との関係に置き換えることができると考える。窓口として直接学生と関わっていく新人教員はスーパーバイザーであり、筆者がスーパーバイザーとして、学生との関わり過程を検討しながら、助言をしていくという関係である。この関係の機能は、①信頼関係の提供、②クライアント(学生)理解への援助、③関係理解への援助が行われると述べられている<sup>7)</sup>。そして、スーパービジョンの関係は、そのまま新人教員と学生との関係につながっていくので、スーパービジョンの機能が果たせるように意識し、新人教員と関わりをもつようにしていった。新人教員からは、学生へ関わる上で有効な関係だった、とコメントがあったので、スーパービジョンは学生への窓口の一本化だけでなく、本来の機能もある程度は果たせたのではないかと考える。

### 3. ゼミ形式の話し合い

教員2人が参加したゼミ形式の話し合いは、その前に、新人教員との話し合いが数回もたれており、ある程度学生の考え方はまとめられていたため、それを確認する場として第1に機能していたといえる。第2としては、【場面1】の①に対する④や、【場面2】の⑤に対する⑧、【場面3】の③に対する⑥のように、どちらかの教員が学生と関わっているのを、客観的に見ている教員が学生の反応をとらえて、学生がわかるように説明したり、言い換えたり、問いかけなど、補う機能があったと考える。第3には、【場面2】の④から⑤のように、話し合いの流

れを読み取り、その流れをすすめるために補う機能もあった。このような補う機能は、ホロウェイとウィラー<sup>8)</sup>が、研究指導者は2人がよいと述べている理由の一つである「もっている知識と技術が異なり、互いに補い合う」ことにもつながるといえる。第4には、学生と教員の交流によるお互いの理解だけでなく、教員間の理解の場としても機能し、スーパービジョンを促進したと考える。

## Ⅵ. 結論

2人の教員が同じ方向で関わるためのあり方は以下のとおりである。

1. 学習目標や関わり方の方向性、お互いの役割の確認を早い時期に行う。確認後も教員間に考え方の相違がある時は、2人で話し合う場をもち調整する。
2. 新人教員が窓口となるスーパービジョンですすめ、要所で2人の教員が参加するゼミ形式の話し合いをする。
3. 話し合いの場では、学生の反応や話し合いの流れをみて、お互いに補い合う。

## Ⅶ. おわりに

卒業研究の過程をとおして、気づかされることが多かった。特に、教員は学生が自分たちの研究に責任をもって行っていく「学生の研究」であることを、常に意識していなければ、「教員の研究」になる危険性が潜んでいるということである。今後の学生との関わりに生かしていきたいと考えている。

最後に、8ヶ月間を共に過ごし、この研究をまとめるのを承諾して下さった学生と新人教員の皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 出羽澤由美子：臨床実習指導の準備と実習指導上の悩みの実態，日本看護学教育学会第12回学術集会講演集，p289，2002
- 2) 望月章子，大津廣子：看護教員の力量形成に関する認識，日本看護学教育学会第12回学術集会講演集，p290，2002
- 3) 坪井桂子，安酸史子：看護教師の実習教育に対する教師効力と不安に関する検討，日本看護学教育学会第12回学術集会講演集，p183，2002
- 4) ホロウェイ，ウィラー／野口美和子監訳：ナース

- のための質的研究入門，p214，医学書院，2000
- 5) 飯田澄美子，見藤隆子編著：ケアの質を高める看護カウンセリング，p99-154，医歯薬出版株式会社，1997
  - 6) 前掲5)，p184-199
  - 7) 佐治守夫，岡村達也，保坂亨：カウンセリングを学ぶ，p183-187，東京大学出版会，1996
  - 8) 前掲4)，p214